

Stifter の “Bergmilch” について

本 岡 五 男

1

Studien と Bunte Steine を全体的に比較する時すぐ気をつくことは、Bunte Steine には、Studien に無い一つの特色のあることである。それは、Bunte Steine に於ては子供が物語の中心に立っていることである。Bunte Steine は、その序文の中にすでに明らかにされているように、元来、若い人たちを対象とした作品集であるが、そう言う意図にそってか、この作品集では、Bergkristall や Katzensilber のように明らかに子供が中心人物となっているか、或は、中心人物ではないまでも、Kalkstein や Turmalin のように子供が物語の背後にいて、その子供をめぐって物語が展開されているかの何れかである。しかし、それも Bergmilch と言う一作を例外としてである。

この例外をどう考えたらいいのか。それにはそれ相当の意味がなければならぬ。このことは又、この作品の制作年代について見る時、一そうその感が深まるのである。I. E. Walter の編した Stifter の年譜¹によれば、この作品の Urfassung である Wirkungen eines weissen Mantels が出たのは1843年だが、同年に出た他の作品 Abdias と Narrenburg は Studien の中に収められているのに、この Wirkungen eines weissen Mantels だけは1853年刊行の Bunte Steine の中に Bergmilch と改題して入れられているのである。制作年代について言えば、成程、Bergkristall の場合も同じである。Bergkristall の Urfassung である Der Heilige Abend の出た1845年には、Hgestolz や Der Waldsteig も出ているが、後の二者が Studien に入っているの

に、Bergkristall だけが Bunte Steine の方に入れられている。だが、Bergkristall は前述のように子供が主人公であって、いわば当然 Bunte Steine の中に入れられるべきものであったと言えるのである。

要するに、子供が中心人物でもなく、又、子供が物語展開の影の中心点にもなっていない、しかも年代的には Studien の時期にあたる Bergmilch がどうして Bunte Steine に収められるようになったのか。しかし、例外と思われる事柄を調べて行けば、却って、全体の意図が明らかになって来るのではないかと思う。ここに、この疑問に基づき、Bergmilch をとり上げて、Bunte Steine に於ける Stifter の意図を探ろうとする次第である。

2

作品に入るに先立ち、時代的背景を概観して置く必要がある。社会状況の推移は詩人に影響を与えずにはいないし、この影響は又、積極的にせよ消極的にせよ、作品の上に必ず反映しているものだからである。

Stifter の時代は、おおよその Stifter の作品から察せられるような平穩無事な時代ではない。1789年のフランス大革命、及びそれに続くナポレオンのヨーロッパ制覇は、ヨーロッパ全土に自由主義を伝播し、その結果はナショナリズムの抬頭となる。そして、この自由主義と国民主義は、ナポレオン没落後の反動政治の抑圧にも拘らず、社会の底に暗流として流れ続ける。やがて、この暗流は次第に各地に頭を持ち上げ、ヨーロッパの至る所に、征服者又は統治者に対する被治の国民の暴動や独立運動となって現われ、専制に対

する自由、保守に対する進歩、の斗争は間断なく、騒然たる世情を招来する。1805年に生れた Stifter は、この渦中に育ったわけである。1830年の7月革命以後はウィーン体制が支配的となり、しばらくは外面的には平穏な時期が訪れて来るのだが、それも嵐の前の静けさに過ぎず、1848年2月には再びパリに革命が勃発する。幾多の民族を含み、雑多な組織を持ち、保守反動の中心人物たる Metternich に支配されていた Stifter の祖国オーストリアに於ても、この嵐が吹きすさんだことは言うまでもない。同年3月には早くもウィーンに暴動が起り、Metternich は逃亡する。所が翌年には又も反動起り、憲法の発布を見たとは云え、オーストリアは再び第二の Metternich と称せられる Schwarzenberg の統治を受ける。次いでドイツ統一をめぐり、オーストリアを含めるかどうかの大ドイツ派と小ドイツ派の対立となり、結局それは小ドイツ派の勝利となったが、これが又、1866年の普墺戦争の淵源でもあった。

以上の概観から明らかなように、Stifter が処女作 Condor を発表した1840年以後 Bunte Steine 発刊の1853年を含む時期は、まことに多事な、めまぐるしい、騒々しい時期であった。こう言う時期の思想はどうであったか。それは、ドイツ文学に於ては、ローマン主義、若きドイツ派、写実主義の三つ巴の斗争の形で現われている。そして、これらの文学運動は、18世紀の古典主義の反動と言う単なる文芸上の現象としてだけでなく、時代の様相とも大きくつながっていた。即ち、フランス大革命及びその後の社会状況の受け取り方の相違により、或いはローマン主義を唱え、或いは若きドイツなる一派を形成し、或いは写実主義を主張するに至ったと言える。ナショナリズムの高まりは、古典主義のギリシャへの憧れやコスモポリタニズムを不満とし、自己の民族乃至は国民の問題に関心を向けるようになるのは当然である。その結果、歴史への関心は高まり、歴史的懐古や空想が好んで行われ、憧れや夢の世界を作り上げることになる。これがローマン主義の起った機運であろう。若きドイツ派の主張は、ロ

ーマン派が過去に目を向け、憧れに終始するに反し、未来に目を向け、社会状況の推移を全面的に肯定して、文学もこの進展に貢献すべきであるとされた。写実主義は、この時代の自然科学の隆盛と関係がある。写実主義は、ローマン主義が感情や想像力に重きを置いたのに対し、理知を重んじ、想像に対しては観察を、理想に対しては現実を、主観に対しては客観を旨とした。

Stifter は、こんな状況に対して、どんな態度をとったろうか。Stifter は、1848年の革命までは、政治についても、芸術についても、何ら見解らしいものを発表していない。1843年から1846年までは、Metternich 家の家庭教師をしていた位だから、保守的とは言えないまでも、政治には無関心であったのかも知れない。詩人としての出発も、何らかの主義主張をひききり、と言うわけではない。Condor が世に出たのは偶然の機会²からであり、引続き同年の1840年に書いた Heidedorf、翌年の Feldblumen が好評を博したしたが、Stifter 自身は詩人としての確固たる自覚も自信も持てず、それらの作品集に題するに謙虚に「習作 (Studien)」としているのである。こう言う Stifter に転機をもたらしたのは、1848年の3月革命であった。Stifter は、もはや、これ迄のように政治的な出来事から目をそらして生活し、詩作し続けて行くことは出来なくなった。この年以後数年間の書簡は、切迫した救世の心情で溢れている。そればかりか、積極的に、Der Wiener Bote や Constitutionelle Donau-Zeitung 等の新聞に、次々と政治問題についての論説を発表している。Stifter が、Joachim Müller の言うように、「革命を熱狂して迎え、新しい自由な創造的な時代の始まりと見ていた」かどうかは判らないが、進歩的な Konstitution 紙では追放者リストに入れられ、他方皇帝派からは「過激自由主義」と思われていた³ と言うことから判断すれば、Stifter は、革命や変革そのものに対しては否定的ではなかった、と言い得ると思う。しかし、至る所に暴動と混乱を見、非理性的な情熱の爆発を見る時、Stifter は結局、革命に対して疑惑

の目を向けざるを得なかった。「私の内にある偉大な、善良な、美しく理性的なものが憤激しました。道徳や敬虔さや、芸術や神聖さのもはや存在しない生活、あらゆる汚穢や獣性が、今や自由だ、と言うわけで、姿を現わす、いや、姿を現わすだけでなく専制政治をする権利があるように思っている生活なんかよりも、死んだ方がずっとましです。」と Heckenast に手紙を書き送っている⁴。古きものが破壊された後に、新しいよりよきものがうち樹てられるとは、誰が保証出来よう。Stifter は、もとより絶対王制に固執しはしないが、かと言って急激な変革を歓迎することも出来ない。Stifter の望むのは漸進的な変革であって、社会には何よりも秩序が保たれていなければならない、とする。彼の考える所によれば、秩序ある国家体制の中では激情は抑制され、教育により国民は次第に真の自由に向って行き、政治的自由は自ら招来されると言うのである。真の自由を得るのは、「他人にきまたげられる恐れなしに、真実な仕事に従事出来、人間的な義務を果すことの出来る⁵」時である。だから真の自由を得る為には、各人の「最大の克己、欲望の抑制、正義⁶」が必要である。「道徳的に自由な人は、政治的にも自由になれるのです⁷。」と言っている。とすれば、Stifter の考えは、政治的と言うよりも、むしろ道徳的と言うべきであろう。そして、その上に、多分に現実ばなれの感のあることは否めないのである。しかし、Stifter がこのような見解を抱くに至った根拠としては、歴史が「人間事象における唯一の、最大の、最も賢明なる教師である⁸」とする歴史観と、教育の陶冶力及び人間の人間的な本質 (humane Substanz) への確信を指摘して置かなければならない。かくて Stifter は、「国家の第一の、そして最も神聖な義務は、教育である⁹」との見解に達し、自らも、1850年には上部オーストリアの国民学校の視学官 (Inspektor) となり、1854年には学務委員 (Schulrat) となって、「つぎはぎをするのではなく、有機的に鼓舞激励しつつ作り出す¹⁰」と言う教育理念の遂行に没頭するのである。この彼なりの実践活動と共に、Stifter は詩人としても反省し、その使命

を自覚するに至る。「芸術は宗教と並んで最高のものである¹¹」とする Stifter の目からすれば、当時のドイツの文学書の大部分は、「女々しく、美辞麗句ばかりで、品位も徳性も、人間的な真面目さもない¹²」のであった。ローマ帝国没落期の様相を思い起す時、Stifter は、「国民が、人類の持っている一番美しいものたる芸術に於いて墮落する時、それは常に国民自身が墮落した印しである¹³」と思う。Stifter は、Constitutionelle Donau-Zeitung 紙に「作家の地位と品位について」を発表する。「良心的に言って、作家の地位は人類の最も神聖な地位の一つである。作家は同胞の教師であり、指導者であり、友人である。作家が詩人として同胞の魂の中に美の理想をもたらし、作家が同胞をその翼に乗せて高みへもち上げ、そして、たとえ同胞が再び沈むことがあっても、もはや最低の段階にまで沈まぬように支えてやり、次の機会に再び高めてやる時、作家は同胞にとって、最高のものの代弁者となり、司祭となることが出来るのである¹⁴。」即ち、Stifter は、同胞の教師となり、指導者となり、友人となり、最高のものの代弁者となり、司祭となることを以って詩人の使命としたのである。こう言う見解からすれば、Stifter がローマン派から袂別し、若きドイツ派に非難を浴びせたのは当然であった。ローマン派に対しては、あるのは想像力だけで、それを規制する理性がなく、従って、思いつきを追い、愚にもつかぬことや馬鹿げたことを表現するとし、若きドイツ派に対しては、「若きドイツ派を一番恐れていました。私は、時事問題や時事的な感情を文学に混入しようとする彼等の立場には、全然同じることが出来ませんでしたし、反対に美は、美であると言う目的以外の目的を持たない……と思っているからです¹⁵。」とその立場を明らかにしている。写実主義については、その代表者 Hebbel と Stifter の対立に現われている。Hebbel 対 Stifter の関係は余りにも有名であるから、その詳細は Joachim Müller の「Adalbert Stifter」に述べてあることを指摘するに止めて、ここでは Stifter 自身の言葉を引用し、Stifter が Hebbel をどう見ていたかだけを示し

て置こう。「彼は、なまの材料、つまり、切石や重荷の取り扱いは断然、驚く程に上手です。それらからは宮殿が出来上る筈なのですが、その宮殿の出来たためしはありません。ですから、しばしば、偉大な光景や、鋭い思想、悲劇的な閃きはあるのですが、それらが調和的に仕えねばならない唯一究極のもの、つまり、神の御意の反映としての客観的な人間の描出がない為に、それらのすべては無意味であり、人に不安な気持を起させるだけなのです。……奇怪なもの、異常なもの、全然節度のないものを事とするのは、力があるように見せかけようと言うわけですが、実は力のないものなのです。どんな力にせよ、力のある印は、節度、抑制、道徳形成なのですから¹⁶」結局、Stifterの目に映ったHebbel像は、「オーストリアにいる唯一人の、最もグロテスクな、道徳的に最もねじくれた、最も自然に背いた詩人¹⁷」であった。そして、1852年には、一般に知られているように、Hebbelに対する論争がきっかけとなってBunte Steineの序文が書かれ、その中でStifterの文学観の一切を集約した「おだやかな法則(das sanfte Gesetz)」が打ち出されるのである。

Stifterの課題とする所は、結局、善と美の調和、もしくは、善の美的表現と言うことになろうか。自分自身の作品に対するStifterの自信ある言葉を披瀝して、この項を閉じよう。「私の本は、単なる詩作ではないのです(そんなものだったら、その価値はごく一時的であるかも知れません)。そうではなくて、私の本は、道徳の表示として、非常な真剣さで守られた人間的な品位として価値があるのです¹⁸。」

3

それでは、Stifterの詩人としての課題は、どのように果されているか。それは、初版のWirkungen eines weissen Mantelsと、詩人の使命を自覚して改作したBergmilchとを比較検討する時、明らかになる筈である。先づ、Wirkungen eines weissen Mantelsの大意を、後の比較を容易にする為に、前述しよう。

構成は、Erste WirkungとZweite Wirkung

の二部から成り、Weidenegg城の管財人(Gerichtsverwalter)の長男の物語る一人称小説である。第一部のErste Wirkungでは、若い人達の心に強い印象を残すのは、行為そのものではなくて、行為の詩情であることが前置きされている。語り手が物語る話は、少年時代に体験したフランス軍侵入の回想である。古城Weideneggは今や戦争の渦中にあった。同盟軍のロシア軍が城の周囲に宿営し、いつ何どきフランス軍が攻めて来るか判らない。若い雇人たちはすべて、兵隊に出て行っていないし、老僕のChristianは、馬や牛を山へ疎開させに行ったりまだ帰って来ない。この城の所有者Amadäus氏と管財人をしている父、それに母と二人の妹、LuluとMarianchenと語り手は、この城で一番安全と思われる隅の部屋に集まり、不安に戦っていた。夜のふけると共に、不安は一層つのもて来る。すると、夜の11時頃、突然白いマントを着た一人の敵兵がこの部屋に音もなく入って来た。この敵兵は、沈着、冷静、そして大胆である。ピストルをつきつけて父とAmadäus氏に案内させ、塔上からロシア軍の宿営の模様をうかがう。愛国主義者のAmadäus氏は、塔上からこの白マントの敵兵を突き落せと父に言うが、父は、「とんでもない。」と言って、Amadäus氏の手を抑える。白マントが城を出て行く時の機敏な動作は、事件の意味も戦争の何たるかもよく判らない幼い語り手の心に印象づけられる。Luluと語り手は、こんな白マントの行動に対して、「男らしい人」と思わず讃嘆の叫びを上げる。敵兵が城から出て行ったことでロシア軍に責められるのを恐れた父やAmadäus氏の不安は、子供たちにも不安を感じさせる。しかし、その夜は何事も起らず、不安なまま朝を迎える。次いで心に蘇るのは、翌日の砲撃のすさまじきである。その後、フランス軍が町に充満したが、語り手の目には、フランス軍は敵兵としてではなく、自分の習っているフランス語を見事にマスターした美しい兵隊としてしか映らない。母の思い出話では、犬を見せにフランス兵を家へ連れ込んで、母を驚かしたこともあった。Amadäus氏は、ロシア軍によってでなく、フランス軍に捕わ

れ、いづこかへ連れ去られて行った。Amadäus氏が帰って来たのは、語り手が学校の高学年になり、すっかり平和になってからである。

これで Erste Wirkung は終るが、この話は始めに言ったように、語り手の少年時代の思い出の中の、「非常に暗く、非常におぼろげな11月の夜の全く孤立した一場面」であって、しかもそれは、子供の印象に残ったもの以外は、父や母の思い出話を辿ったものに過ぎない。Stifter が描こうとしたのは、戦争そのものでも、侵入して来た白マントの敵兵の姿や人物、行為そのものでもなく、子供心に刻み込まれた、不安な雰囲気と、暗夜に疾駆し去る白いマントのイメージである。その為に、人物や事件も、すこぶる具体性を欠いている。要するに、描かれているものは、「空想的な、ローマン的な、おぼろげなもの (etwas Schwärmerisches, Romantisches, Dunkles)」である。

Zweite Wirkung は、前の話の後日譚である。前の話から数年たち、語り手は今や大学2年生になっている。だから、ここに於ては、一応大人としての語り手の直接体験が物語られる。父母とAmadäus氏は年をとり、LuluとMarianchenは非常に美しい乙女となっている。その外には何も変わったことがない。語り手は休暇に帰郷する度に、裏庭に築地 (Erdhügel) を作っていたが、晩秋のある日、皆がその築地に集まり、燦々と降りそそぐ日ざしの中で、漸くにして訪れて来た平和の快い息吹を味わっていると、白マントを着た二人の男が通りすぎる。その中の一人が、例の白マントの兵士であった。彼はエルザス人であることを告げ、以前の行為の謝罪と償い、及び、収獲の多いこの地方の農業を学ぶ為に来たのだと言う。彼は快くこの城に招じ入れられ、暫く滞在して去って行った。しかし、語り手が次の休暇に帰ってみると、彼はこの城の近くに地所を買って住みつづくことにしていたのであった。かくて、最初の事件以来彼の最も熱烈な崇拜者であったLuluと、Luluの美しさに惹かれた彼は愛し合うようになり、結婚する。語り手は、「こんな風な妙な縁で、エルザスの血が我々の系図の中に入って来

た。」と言っている。古びた血の中へ新しい血が流入し、古い血が蘇えるのは、Narrenburgと同じテーマである。Narrenburgがこの作品と同年の1843年に出了たことを思い合わせるならば、Zweite Wirkungで描かれているものは新しい血の流入であると言えよう。Luluと白マントのエルザス人の間に生れた二人の子供たちが、白マントを着た、「赤い、ふっくらとした頬」を持った、生き生きとした姿でこの城にやって来るのも、この新しい血の流入の結果を示していると思われる。

Amadäus氏と語り手自身については、このテーマと関係が無いので、補足的に附言してあるだけである。Amadäus氏は子供好きでひどくLuluの子供たちを可愛いがっていたが、やがて死ぬ。遺言書を開いて見ると、遺産の相続人にはMarianchenが指定してある。Amadäus氏は一生独身で通し、皆から変人として軽蔑されていたのだが、この遺産の処置と、しかも、このことを今までに一言も洩らさなかった奥ゆかしさに、皆は感動し、氏を見なおす。語り手は今以って独身であり、Amadäus氏の轍をふみそうな懸念を抱いている。

以上の大要から判断すれば、この時期のStifterは、Jean Paulの影響下にあつて多分にローマン的であり、究極のテーマもStudienのNarrenburgと同一であり、全くStudienの世界にいたと考えることが出来る。しかし、「自分が成長したと感ぜない者には、以前の作品はすべてその比重が変らないのですから、以前の作品をなげ捨てたりはしません¹⁹」と言っているStifterであつて見れば、革命の激動期を迎え、詩人の使命を自覚するようになった時、以前の作品の改作に着手するのは当然である。Wirkungen eines weissen Mantelsは、標題もBergmilchと変えられ、テーマも文体も一変する。

では改作の後を辿って行こう。Wirkungen eines weissen Mantelsは、「私」の物語る一人称小説であつたが、Bergmilchは、章で切つてない纏った三人称小説である。一人称小説は、作者の想像や空想を由自由に発展させるに適した形式

であるが、三人称小説では、作者の想像や空想が制約を受ける代りに事物を客観的に詳しく描き出すことが容易となる。前者が感情的、主観的であるとすれば、後者は理性的、客観的であると言える。従って、Bergmilch が三人称小説になっていると言うこの点からだけでも、この改作に於ては客観的敘述が志向されていると言い得るのである。果して、Bergmilch に於ては、Urfassung に於いて不明確であった点が明確にされ、不必要な箇所は削られ、すっきりした形で物語が展開されて行く。しかも、テーマの表現を明確にする為に、要所要所は詳細に描かれている。Urfassung では曖昧であった城の状況や、この城の住人それぞれの人間像及び住人相互の関係は、改作では、物語の前置きとしては著し過ぎる位に詳細に描かれるが、それはこの城及びその住人の非時代性を強調する為である。城はもはや、Urfassung の様に、過去の思い出の中に浮び上がる映像ではなく、現代人の目に写る遺物としての城である。火薬の発明は中世的な城塞を無力化し、その存在を無意味にしたが、舞台となる Ax 城 (Weidenegg 城がこう改名されている) もその様な城の一つである。新しい時代の人たちの目からすれば、そのような城は、「脱ぎ捨てられた、ぼろぼろの服」と変らない。Ax 城でも、その塔は今では住人の野菜物置場である。こう言う外形の中に住んでいる人達も、それに相応して風変わりで、現実に生活している一般人ではない。城の所有者は、Bergmilch では非時代性の代表的人物として描けば足りるとしたのか、城主 (Schlossherr) としてあるのみで名前は付けられていない。城主が独身で誰一人身寄りのないのは Urfassung と同じであるが、詳細に描き出されたその人物像は実に奇妙である。美男子で頭の恰好は立派なのだが、体はその頭に不均合いに小さい。そして、その精神的発達はこの体の不均衡と相応していて、何時までも殆んど子供のように純真であったが、明晰な理解力を示した。しかし、それもたたくましい想像力に障げられて、実生活は、「続きのない始めと、始めのない続きばかり」であった。つまり城主は、その風采と共に、いかにも実行力のない頭

でっかちの人間として描かれている。彼が独身で通しているのも、実はこの性格と関係がある。Urfassung では明らかにされていないが、城主はかつてある少女を熱愛したけれども、ふとしたことから自分は彼女にふさわしい人間ではないと思ひ込み、それ以後結婚の意志を全く放棄したのである。その為に身寄り一人なく、城主は、遺産の相続人を探さねばならなくなる。Urfassung ではほんの付け足し程度でしかなかった遺産問題は、ここでは意味を持って来る。家系簿を繰っても身寄り一人いないのが判ると、新聞広告によって身寄りを探したりして変った所を見せ、又、それも成果のないことが判ると、皇帝を遺産相続人に指定した遺言書を書く。このことによって既に城主が愛国主義者であることが示されているのである。城主の性格からすれば財産の管理は難しい。それで管理人が庸い入れられるのだが、城主と管理人の関係も妙である。主従の関係と言うよりも、むしろ友人関係であり、終には財産は二人のもののような外観を呈するようになる。そして、この関係は、管理人が結婚するに至って、更に奇妙になった。管理人夫婦と城主は、以前と同じ様に一つの食卓を囲み、管理人が、「私のからす麦、私の木、私の森、私の今度買った畑」と言えば、城主の方は、「我々の箱、我々の見込、我々の新しい家具」と言い、Ludmilla, Alfred, Clara, Julius と次々に子供が生れると、「我々の子供たち」と言う。子供たちは城主と du で話しあい、事情を知らぬ者が見れば主従を反対に見たかも知れない位であった。子供たちの家庭教師も一風変っていて、城主と管理人と家庭教師の三人は、よく気が合い、やがては家庭教師も、「私の世帯、私の子供たち」と言い出すようになる。この三人の人物及び相互の関係は、どう見ても普通ではない。Stifter は、その描き方に皮肉や揶揄をこめているようである。所が、これに反し、Urfassung に於ては思い出を語り手に語り伝える役しかなかった母親が、ここでは重要な役割を担ってくる。子供たちに一番大きな影響を与えるのは母親だが、教育の重要性を強調する Stifter は、この母親を理想的に描いて行く。「彼女は叱

ったことがなかった。しかし、命ぜられた者が熟知して習慣にってしまうまで、何度も同じことを命令し、同じことをさせるのをいとわなかった。彼女の人は何時も同じで快活だったので、子供達にはむら気がなくなり、又、彼女には、苛酷な所や、粗野な所や、無作法な所が少しもなかった。子供たちは上品に礼儀正しくなった。」そして、母親だけは、三人の男たちと違って、「いつも明るく淳朴」で、「理性的であった。

所で、こう言う人達は、異常なことが起ると、それにどう対処するであろうか。Stifter は、三人の男と母親の対処の仕方を、はっきりと対比しながら描いて行く。三人の男は、戦争が勃発するや最初から非常に興奮し、熱烈な愛国主義者であることを示す。遺産の相続人が見つからなかった時、皇帝を相続人に指定した程の城主が最も烈しくて、「フランス人は泥棒で人殺しだ。奴等は毒虫のように根こそぎやっつけるべきだ。」と言う。フランス軍が迫って来ると、男たちはもう新聞やニュース以外のことは語らず、ますます感情をたかぶらせて行く。母親は、しかし、落ちついていて理性的である。「理性的な人間が、理性的に、正義に従って争いをこらえることが出来ずに、お互いに殺し合っているのは、全くやり切れない。」と言い、事実を見ようとはしないで眼中敵のみと言った三人の男の粗暴を非難する。やがてロシア軍の宿営となるが、Bergmilch では、ここで、熱烈な、しかし、単純な愛国行為が描かれる。村民は出来る限りの協力を示し、城主などは、貯蔵庫、納屋、地下室のすべてを開けて、食糧品や燃料を要求以上に提供し、翌日の準備の為に遠くの領地まで調達しに行く程であった。夜になると外出は禁止され、Ax 城では一同が広間に集まる。Urfassung では、ここで、不安な雰囲気を描き出されているのだが、Bergmilch ではそれがなく、その代りに男たちのおしやべりが続くのである。家庭教師は、古代の歴史との比較話をやるし、城主は、フランス兵をやっつけたチロルの住民の話をして、我々もチロル人のように団結し、武器を執って戦うべきだ、と言う。母親はこれに対し、「住民は静かにして、戦争は軍隊にま

かせておればいいのです。悪いことをしようと思って来るのでなければ、たった一人の敵を打ち殺すなんて罪深い殺人行為です。」と言うが、事実を見ようとはせず、理性を失ってしまった城主は、「奴等は、嫌疑があるとか、皇帝を愛したとか言う理由で同国人を絞め殺し、水に投げ込み、射ち殺し、首をはねたのだ。そうして国外へ出て来て、我々の所でも同じことをやろうとしている。……だから我々は、出来る限り、奴等を追撃し、根こそぎに抹殺すべきだ。」と言う。

しかし、城主は、実際に白マントの敵兵が入って来ると、大言にも拘らず、全く手も足も出ない。塔上へ案内させられるのは Urfassung と同じだが、Bergmilch では、敵兵は全然隙を見せず、城主は終にどうしようもない。感情的な観念のたわむれが、如何に無力で成果のないものであるかが示されている。ここで注意しなければならないのは、改作では、この白マントの敵兵はドイツ人であって、スパイであることである。これが又、一つの伏線になっている。Urfassung では、この敵兵はエルザス人であって、エルザスの地は戦争の都度仏領になったり独領になったりしたから、フランス軍に入ってもさして不審ではない。スパイである為に、愛国者の城主の怒りは一そう激しく、又、この敵兵に讃嘆の叫びを上げる Lulu に対する城主の罵倒は激越である。けれども、この城主の態度によって、その後には城主とこの敵兵の間にかかわされる敵味方の区別を離れた人間同志の握手が、一層その光りを増すわけである。その握手と言うは、フランス軍大勝の翌日に早速例のフランス兵が謝罪に来た時に交わされる握手のことであるが、このフランス兵は、ロシア軍によって塔に閉じ込められていた男たちを救い出し、謝罪を乞い、償いを申し出るのである。城主は、兵士の人間的な面を知るに及んで、「今あなたの立っておられる側に立たれなくなるのが、最上の償いだと思いますが。」と言いつつも、差し出された手を握る。この握手の場面は Urfassung にはなく、Urfassung では、白マントの兵士が謝罪に訪れて来るのはずっと後の平和になってから、それも、通りすがりのようにして

であり、又、城主 Amadäus 氏を連れ去ったのはロシア軍ではなくフランス軍であった。従って、改作においては、この握手に大きな比重をかけてあると言えよう。不倶載天の敵であり、しかもスパイであるこの兵士と、熱烈な愛国主義者とを握手させたのは、実に人間性である。かくて、城主を始め城の住人は、人間として覚醒するのである。彼等は城を病院として、昨夜の戦いの負傷兵を敵味方の別なく救出し、看護に当ることになる。Urfassung では、子供心にイメージを残したに過ぎなかった白マントは、ここでは城の住人の非時代性を打ち破き、その目を現代へ見開かせ、人間らしい人間たらしめる役割を果たしている。

この事件後数年、フランス軍は完敗し、ナポレオンはエルバに、更にヘレナに流され、ここに全き平和が到来する。しかし、戦争の怖しさを目のあたりに見た者たちは、再び戦争を起さなであろうが、「戦争を知らず、情熱のままに行動し、傲慢にも怖いことを繰返そうとする時代や人間が現われるかも知れない。」と言う危惧が起り得る。けれども、この危惧に対しては、Stifter は、象徴を以って答えに代えている。戦争中は幼児であって、全然戦争の影響を受けていない Alfred と Julius が、長じて今や学生になっており、休暇に土盛りをして小さな高台を作り、その上にあずまやを建てるのである。Urfassung では特別な意味の認められなかった築地が、ここでは意味を持って来る。城主や父親が子供たちのそう言う仕事を黙って見ていたのは、「たとえ丘のような不格好なものであっても、建設しているのだから、鳥をつかまえたり追っかけたりして破壊するのよりはずっといいことだ。」と思っていたからである。それ故に、この高台の上での平和な団らんも、Urfassung のそれよりもずっと意味深く読めるのである。そうして、こう言う団らんのある日に例の白マントの兵士が訪れて来るのも、誠に時宜にかなっている。この兵士の訪問は、Urfassung とはすっかり違って、通りすがりに立寄ったのではなく、あの事件以後ドイツ人としてフランス軍の駆逐に従事したことを報告し、今後ド

イツ民族が二度と同胞同志で戦うことがないようにと言う祈願を共にせんが為であった。

その後の、Lulu とこの兵士との結婚、及び、Alfred や Julius を始め Lulu の子供たちが白マントを着、白マントの影響がその後も長くこの家庭に続く、と言う所は Urfassung と同じである。

かくて、この物語りは終るが、ふり返って見ると、Bergmilch と言う改作は、物語の展開が必然性を持つように Urfassung の素材を巧みに配合し、改作の意図を顕わにしようとした作品であることが判る。Stifter がここに描き出そうとしたのは、一言で言えば、理性の重要性と言うことになろう。このことは、Stifter 自身が新しい時期に入ったことを示している。今や Stifter は、ローマン的傾向を脱して、Kunisch に従うならば、古典的な方向に向いつつあるのである。物語の内容がそのことを物語っているだけではない。内容を包んでいる外形も、そのことを証拠立てている。全体が均衡と明確さを得、物語の展開が必然的であることは既に指摘したが、その外に、感情や感覚に訴える個所は弱められ、戦争場面もずっと静かに表現されているのである。例えば、フランス軍の進撃を不安の中に城の一室で待っている時の情景である。Urfassung では、時計の振子の音が何時もより大きく聞え、そして、その音が繰返し繰返し述べられて、無気味な感じを盛り上げて行くのだが、Bergmilch では、一度だけで、しかも、「時計だけが単調に壁で音をたてていた。」としか書かれていない。又、Urfassung では、砲声で大地が揺れ、砲弾は城の庭に火柱をあげて灼裂するのだが、Bergmilch では、遠雷の様に砲声が聞え、窓がかすかにふるえる程度である。又、この方向にそった文体の変化も指摘して置かねばならない。即ち、Urfassung に於てはずい分頻繁に使用されている Gedankenstrich が、Bergmilch では僅かに二個所で使われているに過ぎず、この記号は、Koelwel によれば²⁰、Jean Paul が好んで使用したのだそうだが、して見ると、文体上に於ても Stifter は、Jean Paul の影響を脱したものと見てよいであろう。

更に, Urfassung に散見する exaltieren, füsilien, forcieren, recognoszieren と言った外来語が, Bergmilch では全然見当らない。Kunisch の様に²¹ 詳細に文体を比較することは覚束ないが, この Gedankenstrich と外来語の排除だけでも, 文体に著しく落ち着きを覚えるのである。

4

Wirkungen eines weissen Mantels と Bergmilch を比較することによって, Stifter がローマン的傾向を脱して古典的傾向に向っていることを知ることが出来た。しかし, ここで小論の初めの問題に戻らねばならない。

Frederick Stopp は, Hebbel の非難に関して Stifter が Buddeus に書き送った前掲の手紙の中の, 芸術家は「神の御意の反映としての客観的な人間の描出」を心がけるべきだとした一節を手がかりにして, Stifter の言う客観的の人間は, 孤独で無力であるが, それと同時に強くて打ち勝ちがたい点で numinos な性格を示している子供であるとし, この象徴の現われ方に従って, それの最も顕著に認められる Granit, Kalkstein, Bergkristall のグループと, 教育的見解の顕わな Katzensilber, Turmalin のグループの二群に Bunte Steine を分類しているが, Bergmilch だけは戦争と愛国主義が描かれているだけで例外だとしている。つまり, Bergmilch に於ては, 子供が描かれていない代わりに, 戦争や安価な愛国主義に不可欠な理性の重要性が描かれているのである。けれども, Bergmilch は, Bunte Steine の他の作品と同じように, Stifter が, 詩人としての使命の自覚の下に, 時代の要請を満そうとしたものであることは確かである。だから, Bergmilch が Bunte Steine の中で例外的に見えようとも, 時代に提出しようとする意図の直接的な表現が Bergmilch であり, Bunte Steine の他の作品は, 時代ばなれのしたユートピヤ的な Nachsommer が現代の物語と言われる²² 意味に於ける, Stifter の意図の間接的な表現である, と言う観点に立つ時, Bergmilch はやはり Bunte Steine の中に収められるべき作品であったこと

を知るのである。そして, この二つの道は Bunte Steine を分岐点として, Bergmilch の方向に於ては Witiko に通じ, 他の作品の方向に於ては, Nachsommer に通じるのである。

かくて, Bergmilch を含む Bunte Steine は, Stifter が, 個人の問題から国民乃至は民族全体の問題へ目を向け, それと共に自らはローマン的傾向から古典的傾向へ向う端初についたことを示していると言えよう。

〔註〕

- 1) I.E.Walter の編した Die Bergland/Buch/Klassiker 版の Stifter 選集第一巻冒頭の年譜による。
- 2) あるサロンで, Stifter の隠し持っていた原稿を友人がひそかに抜き取り, 皆の前でそれを披露したのが, そのきっかけと言われている。Stifter 自身は発表する意志を持っていなかった。
- 3) Brief an Gustav Heckenast, 13. Oktober 1849
- 4) 6. März 1849
- 5) Gesammelte Werke ⅧBd. S. 315
- 6) ibid. S. 315
- 7) Brief an Heckenast, 6. März 1849
- 8) G.W. ⅧBd. S. 334
- 9) Brief an Joseph Türck, 26. April 1849
- 10) Brief an Heckenast, 6. März 1849
- 11) Brief an Heckenast, 13. Oktober 1849
- 12) G.W. Ⅷ Bd. S. 336
- 13) ibid. S. 338
- 14) ibid. S. 10
- 15) Brief an Heckenast, 9. Januar 1845
- 16) Brief an Aurelius Buddeus, 21. August 1847
- 17) Brief an Heckenast, 6. Dezember 1850
- 18) Brief an Joseph Türck, 22. Februar 1850
- 19) Brief an Heckenast, 16. November 1846
- 20) Koelwel: Vom Punkt bis zum Bindestrich, Langenscheidt, S. 58
- 21) Kunisch は, 「Stifter 論」に於て Die Mappe meines Urgrassvaters の Urfassung, Studienfassung, Letzte Fassung を, 内容的にも文体的にも詳細に比較検討し, Stifter の古典主義への発展を論究している。
- 22) Fritz Strich: Der Dichter und die Zeit, S. 309

〔使用したテキスト〕

Adalbert Stifter: Gesammelte Werke, Insel-Verlag 1959

Adalbert Stifter: Erzählungen in der Urfassung, Adam Kraft Verlag, 1952

〔使用した文献〕

Friedrich Seebass: Die Lebensgeschichte Adal-

bert Stifters in seinen Briefen, Rainer Wunderlich Verlag, 1951
Konrad Steffen: Adalbert Stifter Deutungen, BirkhäuserVerlag, 1955
Hermann Kunisch: Adalbert Stifter, Duncker & Humblot, 1950
Joachim Müller: Adalbert Stifter, Veb Max Niemeyer Verlag, 1956
Fritz Strich: Adalbert Stifter und unsere Zeit,

in : Der Dichter und die Zeit
Frederick Stopp : Die Symbolik in Stifters Bunte Steine, in: Deutsche Vierteljahrsschrift 28. Jahrgang
Kurt Vancsa : Die Schulakten Adalbert Stifters, Verlag Hans Carl, 1955
Johannes Klein : Geschichte der deutschen Novelle, Franz Steiner Verlag, 1960
坂口昂 : 概観世界思潮